18 世紀パリ、リヨン、ボジョレにおける chemise の着用状況

― 清潔論再考 ―

内 村 理 奈

総合教育非常勤講師

キイワード：

清潔、シュミーズ、礼儀作法、皮膚感覚、17-18 世紀フランス

序

「白く美しい下着を常に身につけていれば、それで十分である」[1] とは、1630 年の刊行以来、ヨーロッパ中でベスト・セラーとなったニコラ・ファレ (Nicolas Faret, 1596-1646) の礼儀作法書、『オネットム、すなわち宮廷で気に入られる術』に出てくる言葉である。この一文は propreté について述べられている箇所にある。propreté とは現代フランス語では「清潔」と訳される語であるが、17、18 世紀の意味内容は現代とは若干異なる。そのことについては後述するが、ここでは便宜上「清潔」としておく。つまり、清潔であるためには白い下着（linge）を身につけなければならないとファレは言ったのである。

ファレ以来、白い下着は身だしなみの基本となり、17 世紀から 18 世紀にかけて、清潔であるか否かは常に白い下着の有無で測られてきた。特に 17 世紀においては、清潔の概念に白い下着が不可欠の要素であり、白い下着を取り替えることが、すなわち清潔になることを意味するようになっていた。このあたりの事情は、ジョルジュ・ヴィガレロをはじめとする歴史家によって論じられている通りだ[2]。18 世紀においてもこのような清潔観は継承され、それがひとつの大きな理由となって白い下着類が広く普及し、個人の下着所有率が増加したと考えられている[3]。アントワーヌ・ド・クルタン（Antoine de Courtin, 1622-85）も、1671 年刊行の、やはりベスト・セラーの作法書『フランスにおいて紳士の間で行なわれている新礼儀作法論』の中で、作法の要である清潔に関する心構えを説く際に、「白い下着さえ着ていれば、贅沢に着飾っているかどうかは問題にならない」[4] と述べている。このように、白い下着さえあればそれで十分であるという清潔観がフランス近世にはあった。

筆者もすでにこの時期の清潔観については論じており[5]、以上のような見解を前提として、そ

れならば何ゆえ「白さ」にこだわるのかという点に焦点をあてて、その背景を探ったことがある[6]。その結果、下着の白さとは、非常に手間とお金のかかる漂白作業によって得られるものであり、真に白い下着を所有し、その白さを維持できるのは、一種の奢侈とも言えるものであったため、清潔とは特権階級に限られるものであったという結論を得た。下着は真っ白に漂白されたものから無漂白の赤褐色のものまであり、色が下着の質を左右し、所有者の社会的身分と対応していたことが理解できたのである。17、18 世紀における清潔とは、豊かさの証に他ならなかった。

一方で、このように下着の色について考察する過程で新たな疑問も生じた。白い下着を求める清潔観とは、実は皮膚感覚の変化を伴っていたのではないかという疑問である。真に白い下着とはおそらく滑らかなものと考えられ、そのような下着を身につけた清潔な装いは、何よりもまず皮膚感覚として心地よいものであったのではないかとも考えられたのである。この時代の清潔は「目に見えるものになった」とヴィガレロは述べ、何よりも視覚の問題として論じられてきているが[7]、実は、素肌でダイレクトに触感として感じることのできるものであったのではないか。心地良い皮膚感覚の追求が清潔を求める背景にあったのではないか。

以上のような仮説を立てることによって、清潔をめぐるフランス近世の人びとの感性を再考できるのではないかと思う。清潔の概念はこれまで視覚と嗅覚の側面からは論じられてきたが[8]、皮膚感覚との関係を論じたものは見られない。本論は、この時期における清潔の問題を、同時代に生きる人びとの身体に接近して、その皮膚感覚に迫って論じようとするものである。この試みによってこの時期の清潔論にもうひとつの新しい視点を提示したい。

資料は遺体調書である[9]。筆者はこの資料の分析を以前から進めているが、皮膚感覚の考察に格好の資料になると考えている。なぜなら、不慮の事故などで死亡した人の身につけている衣類がすべて書き留められているからであり、人びとが日常生活の中でどのような組み合わせで衣服を着ていたか、何を肌に直接身につけていたかがわかる唯一の資料と言ってよいからである。遺体調書は人間の肌と直接に触れる衣服がどのようなものであったか、本人にしかわからないはずの事情を内側から覗くことができる。他の文献資料や図像資料とはまったく異なる角度から、当時の人びとの衣生活を再現することができるのである。

本論で扱う遺体調書は、フランス国立文書館所蔵の 1770 年のパリの調書 132 件、ローヌ県立文書館所蔵の 1700 年から 1789 年までのリヨンの調書 406 件、同期間のボジョレの調書 139 件である[10]。1770 年のパリの調書は、この年の 5 月 30 日に、ルイ 16 世とマリー・アントワネットの結婚の祝賀花火が行なわれた際に大混雑になり、132 名の犠牲者が出た惨事のときのものである。リヨンとボジョレの調書は、さまざまな理由で亡くなった変死体のものだが、その主なものは、この地域に流れるローヌ川、ソーヌ川で溺死した遺体の調書になっている。したがって、調書の性質は多少異なるが、どちらも市井の人びとがその対象になっている点が共通している。

清潔の表現に深く関わった白い下着類にはさまざまなものが含まれるが、本論ではそれらの代表として、シュミーズを取り上げることにする。

1．propreté の定義

先にも述べたように、白い下着を身に着けてさえいれば propreté にかなう装いになる、と当時の作法書はこぞって書いている。propreté を便宜上「清潔」と訳したが、この語の当時の意味内容は単に「汚れがない」ということだけではなく、広い概念を表していた。

propreté は 16 世紀頃に形容詞 propre から派生した。propre には「そのもの自身の属性、ふさわしい、適切である」という意味がある。これが「自らの属性に適切であり、ふさわしい外観に整えてある様子」という内容に発展したのが propreté であり、そこから身だしなみのよいことをはじめとして、優雅で清潔であることをも表すようになった。propreté は 17 世紀初頭まで意味や表記上の混乱が見られたが、それを正したのが文法家のヴォージュラ（Claude Favre de Vaugelas, 1585-1650）である。ヴォージュラは「汚れのなさや礼儀正しさや装飾されていることを表すためには、propreté と言わなければならない」とした[11]。つまり、propreté の意味を「汚れのなさ」と「礼儀正しさ」と「装飾」の総合概念としたのである。「清潔」という訳語では説明しきれない広範なイメージを持つため、17 世紀におけるこの語は、「自らの属性にふさわしく、礼儀正しく、きちんと身だしなみを整えている様子」と捉えたほうがよいだろう。「汚れていないこと」は新たに加わった概念であり、propreté とは何よりも礼儀作法の側面から重視される様態を表現している。そして、そのような身なりを整えるためには白い下着が不可欠であるというのが、当時広く読み親しまれた礼儀作法書の大方の見解であった。

2．ダニエル・ロッシュによるパリの下着の所持率

歴史家ダニエル・ロッシュ（Daniel Roche、1935-）は 1700 年と 1789 年のパリの遺産目録（計 1317 件）を調査し、下着類（linge）がどれほどの価値を持っていたか、また所有数がどれほど変化しているか分析している[12]。彼は 18 世紀後半になるにしたがって下着の所有者および所有率が拡大したと結論している。その際に、職業を 6 つのカテゴリーに分けて分析している。6 つのカテゴリーとは①貴族（nobless）、②給与生活者（salariés）、③家内奉公人（domestique）、④職人および小売商（artisanat et boutique）、⑤官吏（officiers）、⑥庶民および特別の技能のある人（roturiers et talents）である。

ロッシュによれば、下着、中でもシュミーズの所持率は 1700 年から 1789 年にかけて確実に増加している。たとえば 1700 年における女性のシュミーズ所有率は、貴族が 76%、給与生活者が 78%、家内奉公人が 75%、職人層が 91%、官吏や技能者が 73%であったが、1789 年には給与生活者が 93%であるほかは、すべてにおいて 100%になっている。男性の場合もほぼ同様で、1700 年には貴族が 53%、給与生活者が 87%、家内奉公人が 100%、職人が 98%、官吏などが 88%であったのだが、1789 年になると、給与生活者が 96%、職人が 97%であるほかはすべて 100%になっている。

したがってダニエル・ロッシュによるパリの遺産目録の調査においては、18 世紀の初頭から後期にかけて、あらゆる社会階層において白い下着類の所有率は飛躍的に上昇した。それゆえ、彼は、ほとんどの階層の人びとが下着を身につけて生活していたと結論づけている。

3．シュミーズ着用の実態

しかし、当時の人びとは実際に下着を身につけていたのだろうか。遺産目録は箪笥（衣裳箱）の中にしまわれている資産価値のある衣類の記録である。箪笥には下着類がそれなりに所持されていたとしても、価値あるものとしてそこに納められているだけで、実際には身につけていないということはなかったであろうか。

遺産目録とはちがって、遺体調書は実際に身につけていた衣服の記録である。資料のこの点の性質の違いから、遺産目録からは見えてこない同時代の一般の人びとの衣生活の実情が把握できるはずである。

①リヨンとボジョレにおけるシュミーズ着用の変遷

リヨンとボジョレの調書は1700年から1789年にかけてのものである。ある程度の期間ごとに区切って分析すれば、時間軸での経過をたどることができる。ここでは1700年から49年まで、1750年代、1760年代、1770年代、1780年代の５つの期間に区切り、男女に分けて考察した。統計結果は表１から表４の通りである。

表に記した項目の「chemise あり」とはシュミーズを着ている遺体の件数と割合についてであり、「chemise なし」とはシュミーズを着ていない遺体で、シュミーズを着用せずになんらかの他の衣服を素肌に直に身につけている遺体の件数と割合を記している。さらに「衣服の記述なし」とは衣服に関する記述のないものであり、これは書記官がどのような理由からかわからないが衣服の記録を省略した場合（あるいは忘れたのだろうか）や、実際に衣服を身につけていない場合、また明らかに調書上に裸体（nu）と記されているものの件数と割合を示している。

ロッシュの論考を念頭に置くならば、18世紀の後期になるにつれてシュミーズの着用件数は増えていくと予想される。実際はどうなのか。

リヨンの場合、男性の例を見ると、1700年から49年まではシュミーズ着用が29％だったものが、1750年以降50％台に跳ね上がるものの、80年代には43％に落ち込む（表１）。しかも80年代には、シュミーズを着用せずに素肌に何か他の上着を着用している事例が40％にまで増えている。シュミーズの有無の件数が拮抗しているのである。したがって、シュミーズ着用が次第に増えていくという結論を得ることはできない。

表１　リヨン　1700-89年　男性　下着の有無

	1700-49年	1750年代	1760年代	1770年代	1780年代	合計
Chemise 有り	29（29%）	8（53%）	19（54%）	47（52%）	51（43%）	154（43%）
Chemise 無し	24（24%）	3（20%）	6（17%）	16（17%）	47（40%）	96（27%）
衣服の記述なし	46（46%）	4（26%）	10（28%）	26（29%）	19（16%）	105（29%）
計	99（100%）	15（100%）	35（100%）	89（100%）	117（100%）	355（100%）

また、リヨンの女性は総件数が少ないが、1700年から49年までシュミーズ着用が12%、60年代に66%、70年代に14%、80年代に57%となっていて波があり、18世紀全体としてはシュミーズ着用35%、着用せず何か他のものを直接着ているのが33%、そのほかが31%となっており、3分の1ほどしかシュミーズを着用していない（表2）。このシュミーズを着用していない女性たちは、コルセットを直かに着ていたり、カザカンやローブを直接着ていたりという具合になっている。

一方、ボジョレの場合は、男性を見てみると、シュミーズ着用の割合は、1750年代まで60%台、60、70年代になると70%台、80年代になると84%と、次第に増加の傾向にある（表3）。18世紀全体としても69%の遺体がシュミーズを着用しており、シュミーズを着用せず他の衣服を着ているのは17%となっている。女性のほうは総数が少ないので、18世紀全体の割合だけを見ると、シュミーズ着用82%、シュミーズなしが13%である（表4）。ボジョレの場合は男女共にシュミーズ着用がかなり行なわれており、男性のほうでは、18世紀を通じて次第にその割合が増加している。

表2　リヨン　1700-89年　女性　下着の有無

	1700-49年	1750年代	1760年代	1770年代	1780年代	合計
Chemise有り	2（12%）	0（0%）	4（66%）	1（14%）	11（57%）	18（35%）
Chemise無し	3（18%）	2（66%）	1（16%）	4（57%）	7（36%）	17（33%）
衣服の記述なし	11（68%）	1（33%）	1（16%）	2（28%）	1（5%）	16（31%）
計	16（100%）	3（100%）	6（100%）	7（100%）	19（100%）	51（100%）

表3　ボジョレ　1700-89年　男性　下着の有無

	1700-49年	1750年代	1760年代	1770年代	1780年代	合計120
Chemise有り	23（60%）	9（64%）	13（72%）	15（71%）	21（84%）	81（69%）
Chemise無し	9（23%）	3（21%）	3（16%）	2（9%）	3（14%）	20（17%）
衣服の記述なし	6（15%）	2（14%）	2（11%）	4（19%）	1（4%）	15（12%）
計	38（100%）	14（100%）	18（100%）	21（100%）	25（100%）	116（100%）

表4　ボジョレ　1700-89年　女性　下着の有無

	1700-49年	1750年代	1760年代	1770年代	1780年代	合計
Chemise有り	2（50%）	0（0%）	4（100%）	5（100%）	8（88%）	19（82%）
Chemise無し	1（25%）	1（100%）	0（0%）	0（0%）	1（11%）	3（13%）
衣服の記述なし	1（25%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）	0（0%）	1（4%）
計	4（100%）	1（100%）	4（100%）	5（100%）	9（100%）	23（100%）

②リヨン、ボジョレ、パリの比較

パリの遺体調書は1770年のある日のものに限られるので、パリについて時間軸で経過をたどることは不可能である。リヨンとボジョレの18世紀全体のシュミーズ着用実態の平均値と、パリにおけるシュミーズ着用の実態について、比較してみたい。

この三つの都市におけるシュミーズの着用状況は以下の通りである。まず18世紀全体を通して、リヨンの男性遺体は全体の43%がシュミーズを着用し、27%がシュミーズを着用せず別の衣服を直接身につけている（表1）。リヨンの女性は35%がシュミーズ着用、33%がシュミーズなしで他の衣服を着ている（表2）。ボジョレの男性は、69%がシュミーズ着用、17%がシュミーズなし（表3）、女性は82%がシュミーズ着用、13%がシュミーズなしである（表4）。一方、パリにおいては、男性の場合、40%がシュミーズ着用で、60%の人がシュミーズなしで他の衣服を着ている（表5）。女性の場合も、32%がシュミーズを着用しているが、67%の人がシュミーズなしで他の衣服を着用している（表5）。

表5　パリ　1770年　下着の有無

	男	女	計
Chemise有り	18（40%）	28（32%）	46（34%）
Chmiese無し	27（60%）	59（67%）	86（65%）
計	45（100%）	87（100%）	132（100%）

したがって、資料件数が少ないこともあり速断は避けるべきだが、この調査結果においては、シュミーズの着用が最も普及しているのが、ボジョレである。そして最もシュミーズを着用していないのがパリである。パリはシュミーズを着用せずに直かに他の衣服を身につけている者が7割近くにのぼっている。シュミーズの着用の割合は、多いほうからボジョレ、リヨン、パリの順であり、都市より田舎のほうがむしろ多いという意外な結果になった。

③パリにおけるシュミーズ着用事例

ロッシュの考察において、パリでは下着がかなりの階層でほぼ100%の割合で広まっていることになっているが[13]、本論の調査結果では、その着用事例はパリが最も少なく（男性40%、女性32%）、下着を着用せずに直接他のものを着ている事例の方が2倍近くも多くなっている（男性60%、女性67%）。

それではその内訳はどのようになっているのか。リヨンとボジョレに関しては、シュミーズの素材についてすでに論じたことがあるので[14]、ここでは、パリに関しての分析を行う。本論では皮膚感覚に焦点をあてているので、シュミーズの素材だけでなく、シュミーズを着ずに他の衣服を直接着ている人びとに関しても、素肌の上に着ているものがどのようなものであったのかを確認しておきたい。シュミーズを着た事例とそうでない事例に分けて、肌に触れていた衣服についての表を作成してみた。結果は表6から表9の通りである。

表６　パリ　1770 年　男性　総数 45 件
Chemise 有り（18 件）

Chemise	3
Chemise fine	1
Chemise neuve	1
Chemise garnie	1
Mauvaise chemise	1
Chemise de toile	1
Chemise de toile neuve	1
Chemise de toile Cretonne	1
Chemise de grosse toile	6
Grosse chemise	1
Grosse chemise de toile de ménage	1
Total	18

表７　パリ　1770 年　男性　総数 45 件
Chemise 無し（27 件）肌に直接着ている衣服

Habit	1
Habit de drap	1
Veste	6
Veste de drap	9
Veste de damas	1
Veste de Camelot	1
Veste d'indienne	1
Veste de serge	1
Veste de ratine	1
Veste de toile de cotton	1
Veste d'étoffe de soye	1
Gillet	1
Gillet de cotton	1
Gillet de moleton	1
Gillet d'indienne	2
Total	29

表８　パリ　1770 年　女性　総数 87 件
Chemise 有り（28 件）

Chemise	8
Chemise de toile	1
Chemise de toile neuve	1
Chemise de vieille toile	1
Chemise de toile Cretonne	2
Chemise de toile commune	2
Chemise de toile grise	1
Chemise de toile de ménage	1
Chemise de grosse toile	7
Chemise de grosse toile de ménage	1
Mauvaise chemise	2
Total	28

表９　パリ　1770 年　女性　総数 87 件
chemise 無し（59 件）肌に直接着ている衣服

上衣なし	4
Casaquin	7
Casaquin de toile	1
Casaquin de toile blanche	1
Casaquin de toile d'Orange	1
Casaquin de toile de cotton	4
Casaquin d'indienne	10
Casaquin de siamoise	4
Casaquin de couleurs	5
Vieux corset	1
Corset blanc	1
Corset de toile	2
Corset d'indienne	1
Corset de siamoise	4
Corset de bazin	3
Robe	1
Robe de soye	1
Robe d'etamine	1
Robe d'indienne	1
Manteau de lit	1
Manteau de lit d'indienne	3
Manteau de lit siamoise	1
Manteau de lit toile d'Orange	1
Deshabillé	2
total	59

まず、シュミーズを身につけている事例、男性18件と女性28件の素材を見ていきたい（表6、表8）。この時代にシュミーズにもっともふさわしいと考えられていた布地はオランダ亜麻布（toile d'Hollande）であったが、この布地のシュミーズは見当たらない。男女共に最も多いのはgrosse toile（男性6件、女性7件）である。これはいわゆる粗布で、下着にするよりもテントや荷馬車の幌にふさわしいとされる麻布である。その他を見てもあまり良質の布地は見られない。自宅で紡いだ麻をもとに職工に織ってもらった自家製麻布（toile de ménage、男性1件、女性1件）や自家製粗布（grosse toile de ménage、男性0件、女性1件）、ごくありふれた麻布（toile commune、男性0件、女性2件）、おそらく無漂白の灰色の麻布（toile grise、男性0件、女性1件）、また粗悪なシュミーズ（grosse chemise、男性2件、あるいはmauvaise chemise、女性2件）となっており、質の劣るものが大半である[15]。「新しい（neuve）」とか「古い（vieille）」という形容詞がついていることもあるが、新しければ質が良いというわけでもない。

これらの中でいくらか良質なものと思われるのは、上質のシュミーズ（chemise fine、男性1件）と記されているものと、クレトンヌ布（toile Cretonne、男性1件、女性2件）のシュミーズである。chemise fineは麻であるか亜麻であるかはわからないが、上質で繊細な布でできたものなのだろう。クレトンヌ布は経糸が麻で、横糸が亜麻の布地であり、キャラコよりも上質な布とされている。この布の名前は、考案者とされるポール・クレトン（Paul Creton）に由来するとか、ノルマンディーのクレトン村に由来するとか言われるが、いずれにしても18世紀以来ノルマンディーのカルヴァドス県のあたりで作られてきた布である[16]。

すでに論じたことがあるリヨンの事例と同様に、chemise fine とtoile Cretonne以外は、どちらかと言えば粗悪な麻布が多いと言ってよい。

④パリにおけるシュミーズを着ている人びと

これらのシュミーズを着たのはどのような人びとであっただろうか。

職業構成をリヨンとボジョレの事例についても見るべきかもしれないが、調書の性質上、判明する件数割合がパリと比べて低いため、ここではパリに限って述べることにする。パリの方が職業が判明している場合が多いというのには理由がある。つまり、花火見物後の惨事が発生した直後に犠牲者の性別とおよその年齢と服装について記された調書が作成されているのだが、それらの遺体が埋葬された後に、もう一度遺体の詳細な調書が表にして整理されているからである。この2度目の調査表作成時には、ほぼすべての身元が判明した後なので、遺体の名前、年齢、職業、場合によっては住所まで記録されることになった。したがって職業構成は比較的わかりやすい。

パリにおいてシュミーズを着ている男性18件のうち、職業が不明なのは7件、そのほかの内訳は以下のとおりである。ボルドーの貿易商兼艤装業者（négociant armateur Bordeaux）、鋳造職人親方（compagnon de fondeur）、靴職人の下働き（garçon de cordonnier）、指物師親方（compagnon ménuisier）、美容師（coiffeur des Dames）、細工職人親方（compagnon tabletier）、徒弟（apprenti）、ワイン市場の運営委員（commissaire à la halle au vin）、露店商人（forain）、かつら製造業者の徒弟（apprenti perruquier）、刃物製造業職人親方（compagnon coutelier）がそれぞれ1件ずつである。

女性の場合は、本人の職業でなく、夫あるいは父親の職業が書かれていることがある。シュミーズ着用の女性28件のうち、いずれもわからないものが13件、本人の職業が判明しているのが8件、夫か父親の職業が記されているのが7件である。本人の職業に関しての内訳は以下のとおりである。果物売り（fruitière）1件、料理人（cuisinière）2件、家内使用人（femme de chambre）2件、レース編み工（ouvrière en dentelle）1件、お針子見習い（apprentie couturière）1件、産後女性の看護人（garde de femmme en couche）1件である。夫や父親の職業がわかるのは以下のとおりである。指物師（ménuisier）1件、商人（marchand）1件、金銭運搬人（porteur d'argent）1件、水運搬人（porteur d'eau）1件、フランス衛兵（soldat aux gardes français）1件、宿屋の主人（aubergiste）1件、ブドウ栽培者（vigneron）1件である。
したがって、ロッシュの分類に従うならば、若干の非該当者もあるが、男女共に、多くは④の職人および小売商の階級に相当していると言える。

⑤パリにおけるシュミーズを着ていない事例

それでは、シュミーズを身につけずに他の衣服を直接着ている場合、素肌に直かに触れていたのはどのような衣服（布）だったのだろうか。

まず表7を参考にしながら、男性の事例を見ていきたい。男性の場合、アビ（habit、2件）とジレ（gillet、5件）、そして最も多いのがヴェスト（veste、22件）である。素材は大半が毛織物である。つまりこれらの遺体は素肌に直接毛織物の服を身につけていた。もっとも多いのはラシャ（drap計10件、内訳はhabit de drap 1件、veste de drap 9件)であるが、drapは広く一般的な毛織物の総称として使われる語である[17]。camelot（1件）、serge（1件）、ratine（1件）、molleton（1件）も毛織物である[18]。camelotはラクダかヤギの毛の毛織物、sergeはサージのことで綾織りの軽い毛織物、ratineは裏地に使われることもあるもので冬服用の布地である。molletonはフランネルに似た表面が毛羽立っている厚手の毛織物である。比較的厚地の毛織物の衣服を素肌にじかに身につけていたことになる。毛織物以外では、ダマスク織り（damas、1件）、絹織物（étoffe de soie、1件）、インド更紗（indienne 計3件、内訳は、veste d'indienne 1件、gillet d'indienne 2件）、綿布（coton 2件、内訳はveste de toile de coton 1件、gillet de coton 1件）であった。ダマスク織りは絹の場合が多いと思われるが、古くから高級織物として知られる[19]。インド更紗は17世紀からフランスに入ってきて18世紀に人気を博したインドの捺染木綿地である。

次に表9を参考に女性の事例を検討する。女性の場合、上衣を身に着けずにペチコート（jupon）のみを着ていることもあり、シュミーズを着ていない遺体の総数59件のうち4件はそのような遺体であった。素肌に直かに身につけている衣服の内訳は、カザカン（casaquin、計33件）、コルセット（corset、計12件）、ローブ（robe、計4件）、マント・ド・リ（manteau de lit、計6件）、デサビエ（deshabillé、計2件）である[20]。カザカンが最も多いが、これはローブを腰から少し下のあたりで切ったような形態のもので、リヨンやボジョレでも庶民の女性はカザカンを身につけていることが多く、最も一般的な庶民女性の衣服であった。コルセットとローブは説明するまでもないが、マント・ド・リは説明が必要だろう。直訳すれば「ベッドのマント」というものである。

「夜のマント（manteau de nuit)」と呼ばれることもある女性用の部屋着の一種である。袖のついた短いマントで、しばしば毛皮で裏打ちされることがあった。通常は寝室やベッドでくつろぐときに身につけるものであった[21]。デサビエも女性用の部屋着である[22]。1770年のパリの女性にはこれらの衣服をシュミーズなしで肌に直かに身につけ外出している者がいた。

これらの衣服の素材はどのようなものであったか。男性とは異なり、毛織物は見られない。もっとも多いカザカンはトワル（toile)、つまり木綿か麻の平織り布のものが多い（計7件)。そのほかもトワルのものがあり、コルセット（2件）とマント・ド・リ（1件）にも見られる。これらの布の内訳は以下の通りである。ごくありふれた麻布である toile が3件、漂白された白い麻布（toile blanche、1件)、南仏オランジュ産のプリント地(toile d'Orange、2件)、綿布(toile de coton、4件)、である。Corset blanc というものも1件あり、これは白い麻か木綿の布でできたものではないかと思われる。オランジュ産のトワルは1760年頃からパリでも有名になった捺染布であり、ジュイ更紗と競合したとも言われる一種の更紗であると考えていい[23]。したがってインド更紗に近い布地である。インド更紗（indienne）は、パリの女性遺体の衣服ではカザカンに10件、コルセットに1件、ローブに1件、マント・ド・リに3件あり、全部で15件ある。そのほかにはシャモワーズ(siamoise)が計9件(カザカン4件、コルセット4件、マント・ド・リ1件)、バザン(basin)のコルセットが3件、絹（soie）とエタミヌ（etamine）のローブが1件ずつある。シャモワーズとは、ルイ14世が1686年にシャム王国の大使をもてなしたときに彼らが身につけていた独特な布地につけられた名前である。縞模様が特徴の麻と木綿の混織布で、17世紀から18世紀にかけて流行した織物である[24]。バザンとは、リヨンで1580年に作られた経糸が麻、横糸が木綿の布地で、18世紀には非常に広範に行きわたっていた。衣類にはもちろんのこと、家具やカーテンなどさまざまなものに使用された[25]。エタミヌは、中世の修道士が身につけていた毛織物のシュミーズの名前「スタミネア」に由来するとされている。横糸の処理の仕方に起因する小さな穴が無数にあり、布地の厚さ、素材、用途もさまざまで、17、18世紀には市民服や宗教服、家具、さまざまな手工業品、とりわけフィルターやこし器に用いられた[26]。

このように、パリの女性たちが素肌に身につけていた布地に毛織物は見られないが、麻や木綿が主体となるさまざまなものが見られる。そして、それらを素肌に身につけるほうが、シュミーズ着用よりも2倍ほども多かった。

⑥パリにおけるシュミーズを着ていない人びと

シュミーズを着ていないのはどのような人びとであったろうか。パリの調書において、その職業構成はシュミーズを着ている人と大差はないと思われる。

男性遺体の場合、大半はロッシュの分類における④の職人・小売商に該当する。たとえば、屋根葺き職人（couvreur)、靴職人（cordonnier)、指物師（ménuisier)、パン屋（boulanger)、金の圧延工（batteur d'or)、錠前屋（serrurier)、ボタン屋（marchand boutonnier)、リボン屋（marchand rubannier）などである。そのほかの階層に属する遺体としては、郵便配達（facteur)、工場長（chef de l'usine)、王立軍事学校の事務員（commis au bureau général de l'école royale militaire)、弁護士

（avocat à la cour）、建設業者（entrepreneur de bâtiment）、徒弟（apprenti）がいる。

女性遺体の場合は、家内奉公人（domestique）、家内使用人（femme de chambre）、絹の糸巻き娘（dévideuse de soie）、職工（tisserande）、洗濯女（blanchisseuse de linge）などで、ロッシュの分類による③家内奉公人の階層が見られる。女性の場合は本人の職業よりも父や夫の職業がわかることが多いが、その場合の職業構成は男性遺体とほぼ同様であると言える。父や夫の職業は、たとえば、かつら製造業者（perruquier）、大工（charpentier）、仕立て屋（tailleur d'habit）、ワイン商人（marchand du vin）、御者（cocher）、パン屋、菓子職人（pâtissier）、製本職人（relieur）などである。そのほかには、元国王役人（ancien officier du roi）や税関吏(gagne-deniers)[27]のような職業も見られる。

以上のように職業を列挙してみると、パリの町に普通に暮らすありとあらゆる職業の人びとが、ごく当たり前のように、シュミーズを身につけずに暮らしていたと考えられる。

⑦シュミーズを着ている人と着ていない人の装いの比較

シュミーズを着ている人と着ていない人の装いをいくつか具体例を挙げて比較してみることにしたい。

まず、シュミーズを着ている男性の事例を挙げよう。ボルドーの貿易商兼艤装業者のダルジャントン氏50歳である。彼の服装は次のようなもので、パリの遺体調書中では際立って立派な印象を与えている。

> レースが付いた上質のシュミーズ、赤が混ざった灰色のシレジー織の上着には銀モールが付いており、火色のラ・ド・サン・シール織で裏打ちされている、キュロットは[解読不可]で、銀色の靴下止め、灰白色の絹の靴下、銀の丸いバックル付の靴、靴下止めのバックルも銀製、袖口のボタンはありふれた宝石製。[28]

また、ワイン市場の運営者である55歳のエブラール・サンクール氏もシュミーズを着ている。

> かつらをつけ、[...]黒いラシャのアビとヴェスト、灰色のラシャのキュロット、黒いウールの靴下、自家製麻布の粗悪なシュミーズにはバティスト布がついており、靴下止めのバックルは丹銅製。[29]

彼のシュミーズに付属しているバティスト布とはおそらく襟飾りである。

一方、シュミーズを着ていない事例としては、弁護士のマルシャ氏（年齢不詳）がいる。

> 粗悪な灰色の布のアビ、灰色のカムロ地のヴェストは白いボタン付き、木綿の靴下、黒いカムロ地のキュロット、靴のバックルは丸い銀製、靴下止めの二つの小さなバックルも同様、一組の青いボタン。[30]

建設業者のジャック・アヌーズ氏（48歳）も一見立派な装いだが、シュミーズは着ていない。

かつらをつけ、金ボタンの付いた灰色のアビ、金銀の絹地でできた古いヴェスト、靴にはラ・ダムールの銀のバックルが一組ついている。[31)]

また、身元は不明だが、シュミーズは着ていないのに、シュミーズの付属品の取り外し可能な襟だけつけているという興味深い事例もある。

30歳から40歳くらいの男性遺体、髪は灰色、灰色のラシャのアビは黄色い銅のボタン付き、キュロットも同様、灰色の靴下、靴と靴下止めのバックルは黄色い銅、非常に古いモスリンの襟。[32)]

以上のように、シュミーズを着ている人とそうでない人の装いの具体例を挙げてみたが、これらに大きな差異は認められるであろうか。否と答えざるを得ない。たしかにレースもついた上質なシュミーズを着ているダルジャントン氏は、銀モールのついた上着を着たり、袖口に宝石が付いていたり、なかなか羽振りの良さそうな装いをしているが、シュミーズを着ているワイン市場の運営者エブラール・サンクール氏と、シュミーズを着ていない弁護士のマルシャ氏の装いを比較して、どちらがより上等であると言えるだろうか。似たようなものではないか。建設業者のジャック・アヌーズ氏にいたっては、シュミーズは着ていないが、かつらもつけ、金銀の絹地のヴェストを着て、外見的には、それなりに華やいだ印象を与えたに違いない。そして、身元不明の30代か40代の男性はシュミーズは着ていないが、シュミーズに付属させるのが常である襟飾りだけ身につけているというのだから、目に見えるところだけ恰好をつける人もいたことが想像される。

以上のような比較をしてみると、ダルジャントン氏のかなり凝った装い以外は、シュミーズを着ようが着まいが、外見的に大きな差異はないように思われる。シュミーズを着るのが面倒なことであったからなのか、必要性を感じなかったからなのか、あるいは着なくてもごまかしが効いたからなのか。いずれにしても、着ても着なくても、彼らにとっては同じようなものであったのかもしれない。

4．シュミーズの触感

とは言え、作法どおりの整った装いをするためにはシュミーズを着なければならなかった。それが作法書の教えである。しかし、たとえ作法に適う清潔な装いをするためにシュミーズを身につけていたとしても、一般の人びとが身につけたシュミーズは麻製のものがほとんどであった。その麻も、パリの事例や既発表の拙稿で論じたリヨンの事例に見るように、あまり上質のものは見られない。色も白とは限らず、黄色がかったものから、赤褐色のものまで、さまざまである。すでに論じたように、麻の色は品質に対応しており、白いものが最も上質で、次に灰色がかったもの、緑、黄色と質が劣っていき、褐色のものは廃棄処分になるほどの劣悪なものとされていた[33)]。リヨンと同様に[34)]、表6と表8のパリで見られる事例も、上質なシュミーズはほんのわずかであり、ほとんどが並以下の品質である。したがって、色も決して白いものとは限らなかったろう。

これらの麻布は実際身につけるとどのような触感であったろうか。

『百科全書』によれば、麻の品質は、色はもちろんのこと、感触で判別できる[35]。麻は雌雄別株だが、雄株の方が良質で光沢があり、雌株は硬くこわばっているという。

ルイ 14 世の愛人モンテスパン夫人は夫の死後人知れず禁欲生活を送ったが、そのときに粗悪な麻の下着を身につけて、自らに苦行を課した。彼女の下着は「非常にごわごわした、大変硬い黄色い麻布」[36] でできており、それを身につけることで肉体的な苦痛を自らに強いたというのである。ヴィガレロは「夫人にとって麻の織物を身につけることは、それだけで身を卑しめることを意味した」[37] と述べている。

つまり、麻は触感が悪かった。18 世紀に生まれたとされる「夫婦用寝間着」、いわゆる「初夜のシュミーズ」は、夫婦の性の営みをシュミーズに開けられた開口部で行うという、実にキリスト教的な慎み深い寝間着として知られるが[38]、ジャン・クロード・ボローニュによれば「とにかく麻の下着は新しいときには硬すぎてまくり上げるのに不適である。したがって裂け目を作っておく必要があった。麻の下着は最初に着る前にはそのまま立つほど硬張っており、柔らかくするために木にたたきつけなければならなかったのである。」[39] 麻の下着は木に叩きつけて柔らかくする必要があるほど硬いものであった。

当時の洗濯（漂白）も石に叩きつけるという作業を行なった。そうであるならば、洗濯で麻の下着も柔らかくなるように思われるが、そう簡単に柔らかくなるものでもなかった。パリ近郊での洗濯のお粗末さを語る次のような証言がある。

> パリの近郊では、炭酸ナトリウムの代わりに石灰を使う洗濯女がいる。それで下着を傷めてしまい、すっかり硬張らせて、触れるのも不愉快なものにしてしまう。[40]

せっかく洗濯に出しても、かえって下着を傷めることになり、むしろ肌触りの悪いものになってしまうというひどい状況であった。上質な麻製の下着ならまだしも、質の劣る麻の下着の触感の悪さは容易に想像できる。

一方、白い亜麻製の下着は肌触りが良かったはずである。下着に最もふさわしいとされた真白いオランダ亜麻布（toile d'Hollande）について、『百科全書』は以下のように述べている。

> 普通、男女のシュミーズを作るのに使われる非常に繊細で非常に美しいトワルのことを toile d'Hollande あるいは toile de demi-Hollande と呼ぶ。[41]

ここで「繊細」と訳した部分は fine であるが、この語には「細かい、薄い、繊細な、上質の」等の意味がある。上質のトワルにはこの fine という形容詞がつくことが多く、軽やかな風合いの良さを想起させる。

モンテスパン夫人のエピソードから想像できるように、上流階級の人びとは普段から肌触りの良い下着ばかりを身につけていた。だからこそ、麻衣が苦行衣として感じられた。しかし残念ながら、このような白い上等の下着の肌触りの良さに関して、同時代の証言を得ることは難しい。意外にもそのような記述のある文献資料は管見では見当たらない。麻の肌触りの悪さが各種の文

献で強調されるなかで、その裏返しとして、亜麻製の下着は肌触りが良かったであろうとしか現時点では言えない。とは言え、白い上質の下着を身につけることで実現される「清潔」は、肌触りの気持ちの良さを日常的に享受できる人たちにのみ実感できるものであったことは疑う余地がない。

結論 —— 清潔論再考のために

庶民には下着を着ない日常があった。白い下着を身につければ良いという作法書の教えはそう簡単に行きわたるものではなかった。あるいは、作法書は白い下着を身につけない人びとのことを初めから度外視して propreté を特権化する意図がはたらいていたと見るのが妥当かもしれない。苦行衣として麻を身につける上流社会と、日常的に粗布を身につける庶民との間の差は大きい。

ダニエル・ロッシュによれば、ほぼ100％のパリの人びとが下着を所有していたことになるが、本論の調査結果は、実際に人びとが下着を着ていたかどうかという点に疑問を投げかける形になった。しかも、地方都市であるリヨンやボジョレより、むしろパリのほうが下着を着ていなかった。このことをどのように考えたらよいのか。

メルシエ（Louis Sébastien Mercier、1740-1814）が『タブロー・ド・パリ』（1782-88年）で描写しているように、パリの人びとは「シーツ、飾りひも、それにレースさえも買うが、下着は少しも買わない[42]」ものだったのだろうか。パリの1770年の遺体調書の調査結果では、7割近い人々が、メルシエが述べているように、ポン・ヌフのそばで「フロックコートをじかに着て、自分のただ1着のシャツ（シュミーズ）か、たった一枚のハンケチを洗っている」[43]人と同じような姿で、花火見物をしていたことになる。

パリでもリヨンでもボジョレでも、下着を身につけずに毛織物やそのほかの織物の上着を直接着ている人びとが相当数いた。下着を着る人と着ていない人の間に、職業・社会階層の差異が認められるとは言えそうもない。外見的に大きな差があるとも言えない。庶民にとっては、下着を着ようと着まいと、同じことであったのかもしれない。下着を着ずに上着を直接着ることと、麻の粗悪な下着を着ることは、皮膚感覚の上では、ほぼ同じようなものだったのではないか。それゆえ、毛織物の上着を直接身につけることに、なんの不都合も感じなかった。しかも、上着を直接着ていても、それなりの体裁を整えられるという認識もあったのかもしれない。

リヨンとボジョレ、そしてパリの限られた数量の遺体調書によって分析を試みたが、清潔観という感性の大きな変化をたどるにあたって、分析に十分な数量を得られたとは言えないのかもしれない。しかし、数量的限界があるとは言え、ここで述べたような事実が、現に事実として存在したことは、新しい知見として認められるだろう。

本論では、一般の人びとが、決して肌触りの良いものを素肌に身につけていなかった事実を確認した。そうであるならば、繊細な白い亜麻製の下着によって実現される「清潔」とは、特権階級にのみ可能な、心地よい皮膚感覚の追求にかかわる奢侈であったことになる。皮膚感覚の心地よさを求めることが、当時の贅沢な清潔観と密接に関わっていた。

作法書が説く白い下着による propreté とは、視覚だけの問題でなく、それを身につける当事者

にとっては、皮膚感覚の快・不快に関わる問題でもあった。白い下着を身につけることは、デリケートな素肌をもっていることを暗示した。繊細な皮膚感覚、繊細なものにしか耐えられない感受性を特権階級の占有物としていくことが、清潔の問題が当時の作法書の中でクローズアップされたことの本質ではなかったのか。

注

1）Nicolas Faret, *L'honnête homme ou l'art de plaire à la cour*, (1630), Slatkine Reprints, Genève, 1970, p.93.《C'est assez qu'il ait toujours de beau linge et bien blanc》訳文は筆者による。以下ことわっていないものはすべて同様。

2）Georges Vigarello, *Le propre et le sale, L'hygiène du corps depuis le Moyen Age*, Seuil, Paris, 1985.（ジョルジュ・ヴィガレロ『清潔になる私―身体管理の文化誌』見市雅俊監訳、同文舘、1994年。）Nathalie Mikaïloff, *Les manières de propreté, du Moyen Âge à nos jours*, Éditions Maloine, Paris, 1990.

3）Daniel Roche,《L'invention du linge au XVIIIe siècle》, in *Ethnologie française*, t.16, no.3, 1986, pp.227-238.

4）Antoine de Courtin, *Nouveau traité de la civilité qui se pratique en France parmi les honnêtes gens*, (1671), Publications de l'Université de Saint-Étienne, 1998, p.108.《surtout si on a du linge blanc, il n'importe pas que l'on soit richement vêtu》

5）拙稿「ギャラントリー ―17 世紀前期フランスの社交生活と服飾―」、『服飾美学』第 24 号、1995 年、pp.57-74。拙稿「下着の色と清潔―十八世紀リヨンの遺体調書に見られる事例から―」、『服飾美学』第 30 号、2000 年、pp.33-48。

6）前掲拙稿「下着の色と清潔」。

7）Vigarello, *op.cit.*, p.74.（ヴィガレロ、前掲書、p.84。）

8）*Ibid.* およびアラン・コルバン、『においの歴史、嗅覚と社会的想像力』、山田登世子、鹿島茂訳、藤原書店、1990 年。

9）本論で扱う遺体調書については以下で詳述している。前掲拙稿「下着の色と清潔」。拙稿「庶民の上着― 18 世紀リヨン、ボジョレ地方の遺体調書から―」、『服飾文化学会誌』vol. 5、2005 年、p.9-19。拙稿「1770 年代の遺体調書にみるパリとリヨン、ボジョレの服飾」、『人間文化論叢』第 9 巻、2007 年、pp.131-39。

10）Procès-verbaux de levée de cadavre（以下では PVLC と略記）, Archives Nationales（以下では AN と略記）、請求番号は Y15707。PVLC、Archives départementales du Rhône、リヨンの調書の請求番号は 2B45, 2B57, 2B58, 2B82, 2B94, 2B109, 2B124, 2B192-194, 2B196, 2B197, 2B201, 2B280, 2B334, 2B337, 2B342, 2B381, 2B383, 2B384, 2B468, 11G314, 1H223。ボジョレの調書は、4B11, 4B80, 4B81, 4B115, 4B143, 4B154, 4B176, 4B196, 4B212, 4B236, 4B266。

11）Claude Favre de Vaugelas, *Remarque sur la langue Françoise*, (1647), Slatkine Reprints, Genève,

1970, p.5.《pour dire, le soin que l'on a de la netteté, de la bien-séance, ou de l'ornement […], il faut appeller cela *propreté*》

12) Roche, *op.cit.*

13) *Ibid.*

14) 前掲拙稿「下着の色と清潔」。

15) これらの麻布の種類については、同前掲拙稿参照。ただし、toile commune を地方産麻布としているのは誤りであるので本論で訂正する。また toile de pays も地場産の麻布であるのでここで訂正しておきたい。

16) Elisabeth Hardouin-Fugier, *Les Étoffes, dictionnaire historique*, les Éditions de l'amateur, Paris, 1994, p.155-56.

17) 前掲拙稿、「庶民の上着」参照。

18) 前掲拙稿、「庶民の上着」参照。

19) E. Hardouin-Fugier, *op.cit.*, pp.159-163.

20) Deshabillé の発音は通常「デザビエ」だが、リシュレによれば部屋着を指す場合「デサビエ」であった。P. Richelet, *Dictionnaire Français*, (1680), France Tosho Reprints, Tokyo, 1969.

21) manteau de lit については以下の辞書を参照。*Dictionnaire universel d'Antoine Furetière*, (1690), Le Robert, Paris, 1978.　*Dictionnaire universel Français et Latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux*, la compagnie des Librairie associés, Paris, 1771. Emile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, Librairie Hachette, Paris, 1881-82. Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle*, (1866) , Slatkine Reprints, Genève-Paris, 1982.

22) Deshabillé については以下の辞書を参照。Furetière, *ibid.* P. Richelet, *op.cit.*

23) オランジュ産のトワルについては E. Hardouin-Fugier, *op.cit.*, pp.286-88 参照。

24) *Ibid.*, pp.357-58. シャモワーズに関しては次の論文を参照。辻ますみ「シャムワズールイ 14 世代の一流行とフランスの綿産業」『服飾美学』第 26 号、1997 年、pp.79-94。

25) *Ibid.*, p.80.

26) *Ibid.*, p.186.

27) gagne-deniers に関しては次を参照。Alfred Franlklin, *Dictionnaire historique des arts, métiers et professions exercés dans Paris depuis le XIIIe siècle*, Marseille, Laffitte Reprints, 1987 (1905-06), tome 1, p.352.

28) AN, PVLC, 請求番号 Y15707, no.4.《vêtu d'une chemise fine moulée en dentelles, […] vétu d'un surtout de drap de Silesie gris, mélé de rouge galonné en argent doublé de Raz de St.Cyr couleur de feu, culottes parcelles [illisible] avec jarretieres en argent, bas de soye gris blanc, souliers boucles rondes d'argent, boucles de jarretiere aussi en argent, un bouton de manche moulé de pierre commune.》綴りは原史料のまま。以下同様。シレジー織は廉価なサージで、ラ・ド・サン・シール織は絹織物の一種である。

29) AN, PVLC, Y15707, no.114.《portant perruque, […]vetu d'un habit et veste de drap noir, d'une culotte

de drap gris, d'une paire de bas de laine noire, d'une grosse chemise de toile de ménage garnie de Batiste des boucles à jarretierres de Tombac.》

30) AN, PVLC, Y15707, no.40. 《vetu d'un habit de grosse etoffe grise, d'une veste de Camelot gris a boutons blancs bas de cotton d'une culotte de camelos noire une bocle de souliers d'argent ronde deux petites boucles de jarretiere pareille une paire de boutons bleu.》

31) AN, PVLC, Y15707, no.132. 《portant perruque, […]vetu d'un habit de drap gris à boutons d'or d'une vieille veste d'étoffe de soye or et argent à ses souliers une paire de boucles d'argent à las d'amour.》 ラ・ダムールの詳細は不明だが、おそらくバックルの形状を表す言葉と思われる。

32) AN, PVLC, Y15707, no.83. 《un cadavre masculine de l'age d'environ trente à quarante ans portant cheveux gris, vetû d'un habit de drap gris a bouton de cuivre jaune et culotte pareilles des bas gris, boucles à souliers et à jarretieres de cuivre jaune et un col de mousseline très vieux.》

33) Denis Diderot, Jean Lerond d'Alembert, *Encyclopedie : ou Dictionnaire raisonné des sources, des arts et des métiers par une société de gens de lettres*, (1751-1781), Readex Microprint, New York, 1969.

34) 拙稿「下着の色と清潔」参照。

35) Diderot, *op.cit.*

36) Saint-Simon, *Mémoires de Saint-Simon*, t.15, Librairie Hachette, 1929, p.96.《ses chemises […] étoient de toile jaune la plus dure et la plus grossière》

37) ヴィガレロ、前掲書、p.96。

38) Joseph Vaylet, *La chemise conjugale*, Rodez, Subervie, 1976.

39) ジャン=クロード・ボローニュ『羞恥の歴史―人はなぜ性器を隠すか』、大矢タカヤス訳、筑摩書房、1994 年、p.150。

40) Pierre Jauvert, *Dictionnaire raisonné universel des arts et métiers, contenant l'histoire, la description, la police des fabriques et manufactures de France et des pays etrangers*, t.1, Delalain fils, Paris, 1801, p.271-72.《Aux environs de Paris, quelques blanchisseuse servent de chaux à la place de soude, ce qui brûle le linge et le rend extrèmement dur et désagréable au toucher.》

41) Diderot, *op.cit.* 《TOILE D'HOLLANDE, TOILE DE DEMI-HOLLANDE, on appelle ainsi des *toiles* très-fines & très-belles qui servent ordinairement à faire des chemises pour hommes & pour femmes.》

42) Louis Sébastien Mercier, *Tableau de Paris, I*, Mercure de France, Paris, 1994, p.1087-88. (ルイ=セバスティアン・メルシエ『十八世紀パリ生活誌―タブロー・ド・パリ (上)』、原宏編訳、岩波文庫、1989 年、p.163。)

43) *Ibid*, p.1087. (同書、pp.162-63。)